

令和 2 年 5 月 22 日現在

機関番号：12601

研究種目：基盤研究(B)（一般）

研究期間：2016～2019

課題番号：16H03347

研究課題名（和文）哲学的知識の本性と哲学方法論に関するメタ哲学研究

研究課題名（英文）Metaphilosophical Studies on Philosophical Knowledge and Methodology

研究代表者

鈴木 貴之（Suzuki, Takayuki）

東京大学・大学院総合文化研究科・准教授

研究者番号：20434607

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 8,300,000円

研究成果の概要（和文）：分析哲学においては、概念分析が哲学の中心的な課題であり、概念分析はさまざまな個別事例に関する直観に依拠して進められると考えられてきた。本研究では、このような哲学方法論には分析哲学内部における理論的批判や、実験哲学研究による実証的批判が存在すること、それに代わる哲学観としては、自然化された認識論に依拠した経験的探究としての哲学、質問紙調査などの実証的な手法を取り入れた実験研究としての哲学、概念工学としての哲学など、いくつかの有望な代替案が存在することを明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究では、個別事例に関する直観に基づく概念分析という標準的な哲学観に疑問を投げかけ、それに対するいくつかの代替案を明らかにした。その成果は、質問紙調査に基づく実験哲学研究に見られるように、哲学研究手法の拡張につながるとともに、個々の哲学的問題における論争に新たな進展を促すことが期待される。さらに、哲学を社会にとって有用な概念を創造する営みと捉えることは、哲学の社会に対する関与を強めることにつながる。このように、新たな哲学観は、哲学的探究の多様化、活性化、社会化につながることが期待される。

研究成果の概要（英文）：In analytic philosophy it has been thought that the central task of philosophy is conceptual analysis and the basis of conceptual analysis is intuition on individual cases. In this research project, we found that there are theoretical criticism on this standard view of philosophy, as well as empirical criticism from experimental philosophers and that there are some promising alternative views of philosophy; philosophy as an empirical inquiry based on naturalized epistemology, philosophy as experimental study adopting empirical methods such as questionnaire survey, and philosophy as conceptual engineering.

研究分野：哲学

キーワード：メタ哲学 実験哲学 自然主義 概念工学

1. 研究開始当初の背景

哲学とはどのような学問かという問いは、カント、現象学者、論理実証主義者など、哲学の刷新を試みた人々によって、これまでもたびたび問われてきた。しかし、英語圏を中心とした哲学研究においては、彼らの見解はいずれも支配的となることはなく、現在では、いわゆる分析哲学が主流となっている。

分析哲学においては、1990年代から、スティッチ、ゴールドマン、コーンプリスらが、認識論に認知科学などの研究成果を取り入れた自然化された認識論 (naturalized epistemology) の観点から、概念分析や思考実験といった分析哲学の標準的な方法論に対する批判を展開してきた。さらに、近年では、実験哲学 (experimental philosophy) の台頭によって、分析哲学の標準的な方法論は、さらなる批判にさらされている。これに対して、分析哲学を擁護する側からも、さまざまな反論が提出されている (たとえば T. Williamson, 2007, *Philosophy of Philosophy*, Blackwell など)。このように、哲学についての哲学、すなわちメタ哲学は、近年再び多くの哲学者の関心を集めている。その状況は、*Metaphilosophy* 誌掲載の諸論文や、Oxford Studies in Experimental Philosophy 叢書の刊行などからもうかがえる。

2. 研究の目的

本研究の目的は、上記の背景と、研究代表者および研究分担者がこれまでに行ってきた哲学的自然主義や実験哲学などに関する研究の成果をふまえ、メタ哲学一般に研究対象を拡大し、哲学という学問の本性についてより包括的な考察を行うことである。具体的には、哲学的知識の本性の解明、従来の哲学方法論の評価、哲学的自然主義の可能性と限界の検討、実験哲学の意義の評価、メタ哲学的観点からの哲学史の見直し、という5つの課題について研究を進める。研究の目的は、これらの課題の考察を通じて、哲学の本性や方法に関する一連の問いに解答を与えることである。研究の核となるのは、哲学は単一の目的や方法を共有する統一的な学問領域なのか、という問いである。

3. 研究の方法

本研究では、メタ哲学に関連する上記5課題について、研究会や学会ワークショップ等を通じて、4年間で順に研究を進める。初年度は課題 および課題、次年度と次々年度は課題 および課題、最終年度は課題を中心に研究を進める。研究成果は国内・海外の学会等で発表する。同時に、海外から講演者を招聘し、短期セミナーやシンポジウムを開催することを通じて、海外のメタ哲学研究者との連携を推進する。研究組織には、メタ哲学への関心を共有し、異なる領域を専門とする若手研究者が、中核的な役割を果たす研究分担者・連携研究者として参加し、さらに、研究経験の豊富な研究者がアドバイザー的な役割の連携研究者として参加する。

4. 研究成果

4年間の研究期間に、以下に記す代表的な研究成果を含めて、学会におけるワークショップ3件、国際ワークショップ4件、セミナー1件、講演会13件、共著5冊(うち研究代表者が編者であるもの1冊、連携研究者が編者であるもの1冊)、論文11本、学会発表36件の研究活動を行った。

その主要な研究成果は以下の通りである。

課題 に関しては、哲学を自然科学と類比的な客観的事実の探究と考える見方に対する有望な代替案として、哲学を社会にとって有用な概念の創造・改変の営みと考える、「概念工学」と

しての哲学という考え方に着目し、心や自由意志といった概念について、その具体的な可能性を検討した。その成果は、鈴木貴之と太田紘史が分担執筆した共著『<概念工学>宣言！：哲学×心理学による知のエンジニアリング』として公刊されている。

また、オスロ大学 ConceptLab との共催で、2018年と2019年に東京大学駒場キャンパスにおいて概念工学と哲学における進歩を主題とした国際ワークショップを開催した。これらのワークショップの開催を通じて、メタ哲学における最新の研究動向を学ぶとともに、海外のメタ哲学研究者との人的ネットワークの形成を進めた。

課題 に関しては、哲学における直観の役割やその信頼性をめぐる論争について考察し、分析哲学における主要な主要である概念分析においては直観が不可欠な役割を果たすが、その信頼性を疑うべき原理的・経験的な理由が複数存在することを明らかにした。その成果は、鈴木貴之の論文「哲学における直観の信頼性」などとして発表されている。

哲学方法論に関する個別的な問題としては、とくに規範倫理学における直観使用についてセミナー等において検討し、道徳に関する心的メカニズムの進化的来歴から道徳的直観の信頼性を疑う論証にはさまざまなバリエーションがあること、そのいずれも決定的とはいえないこと、義務論だけがその種の論証の対象となるわけではないことなどを明らかにした。その成果は、笠木雅史の論文「進化論的暴露論証とはどのような論証なのか」などとして発表されている。

課題 に関しては、2016年の日本科学哲学学会大会におけるワークショップなどを通じて、哲学的自然主義とはどのような立場か、自然主義と物理主義はどのような関係にあるか、自然主義に対する代替案としてはどのような立場があるかといった問題を考察し、哲学的自然主義の本質は基礎づけ主義の拒否にあること、物理主義は自然主義の1つの有力なオプションであることなどを明らかにした。その成果は、井頭昌彦の論文「哲学的自然主義の内と外」などとして発表されている。

また、自由意志、責任、心、意識といった個別の問題について、それらを自然化することにはどのような困難が存在するか、それらについて自然主義的な見方をとることで、われわれの常識や社会実践にはどのような変化が生じるかといった点について考察した。その成果は、鈴木貴之の論文「哲学における責任の問題」や太田紘史の論文「意識をめぐる物理主義と反物理主義のバトルライン」などとして発表されている。

課題 に関しては、実験哲学を主題とした初の日本語書籍である『実験哲学入門』を、鈴木貴之を編著者として共同執筆した。2020年6月出版予定の同書では、実験哲学の成立背景、哲学の主要トピックにおける実験哲学研究の流れ、実験哲学のメタ哲学的な意義などを概観し、実験哲学には方向性を異にする3つのプロジェクトが含まれるが、それぞれのトピックに関する実験哲学研究においては、それら3つの方向性が複雑に関係しあっており、実験哲学には哲学の論争解決を促すという積極的な可能性、従来の哲学方法論に根本的な再考を促すという破壊的な可能性、哲学的な主題に関する認知のメカニズムを明らかにするという認知科学研究としての可能性など、多様な可能性が開かれていることを明らかにした。

また、2017年2月には、南山大学名古屋キャンパスにおいてヴィクトリア大学のジャスティン・シツマ氏を講演者とした連続セミナーを開催し、実験哲学の具体的な研究手法や、氏が行っている最新の研究について議論し、今後の研究交流に向けての基盤を確立した。

さらに、個別的な実験哲学研究としては、言語哲学を主題とした笠木雅史らによる論文「Definite Descriptions and the Alleged East-West Variation in Judgments about Reference」や「Problems of Translation for Cross-Cultural Experimental Philosophy」などが発表されているほか、太田紘史が自由意志やメタ倫理学に関する実験哲学研究のレビューを行った。

課題 に関しては、これまで不明な点が多かった20世紀前半における分析哲学の成立過程について、近年出版された文献の分析などを通じた研究を進め、この時期に英語圏とドイツ語圏を中心として複雑な研究交流が成立していたことを明らかにした。その成果は、2017年の日本科学哲学学会シンポジウムにおいて笠木雅史によって発表され、論文「ケンブリッジ分析学派の興

亡：「言語論的転回」はいつ起こったのか？」として発表されている。

以上の研究を通じて、直観に依拠した概念分析という分析哲学の手法に関しては、分析哲学内部における理論的批判や、実験哲学者による実証的批判が存在すること、それに代わる哲学の方法論としては、自然化された認識論に依拠した自然主義的な方法論、質問紙調査などの実証的な手法を取り入れた実験哲学、概念工学としての哲学など、いくつかの有望な代替案が存在することが明らかになった。残された課題としては、直観に依拠した概念分析としての哲学という見方にはどの程度の可能性が残されているのかを明らかにすること、それぞれの代替案が、哲学の各問題領域においてどの程度の妥当性と有効性をもつのかを明らかにすることが挙げられる。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計11件（うち査読付論文 4件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 笠木雅史	4. 巻 51-2
2. 論文標題 ケンブリッジ分析学派の興亡：「言語論的転回」はいつ起こったのか？	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 科学哲学	6. 最初と最後の頁 3-27
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 鈴木真	4. 巻 33
2. 論文標題 唐沢かおり『なぜ心を読みすぎるのか』（書評）	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 社会と倫理	6. 最初と最後の頁 204-209
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Masashi Kasaki	4. 巻 52
2. 論文標題 The Ubiquity of the Generality Problem	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 関西学院哲学研究年報	6. 最初と最後の頁 31-59
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 太田紘史	4. 巻 46
2. 論文標題 物理主義を論駁することの難しさについて	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 現代思想	6. 最初と最後の頁 267-277
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 鈴木貴之	4. 巻 90
2. 論文標題 哲学における責任の問題	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 法律時報	6. 最初と最後の頁 33-38
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 太田紘史	4. 巻 45(21)
2. 論文標題 意識をめぐる物理主義と反物理主義のバトルライン	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 現代思想	6. 最初と最後の頁 133-153
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Masashi Kasaki	4. 巻 34(3)
2. 論文標題 Problems of Translation for Cross-Cultural Experimental Philosophy	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 Journal of Indian Council of Philosophical Research	6. 最初と最後の頁 481-500
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) https://doi.org/10.1007/s40961-017-0119-5	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 井頭昌彦	4. 巻 45(21)
2. 論文標題 哲学的自然主義の内と外	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 現代思想	6. 最初と最後の頁 186-206
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 鈴木貴之	4. 巻 47
2. 論文標題 哲学における直観の信頼性	5. 発行年 2016年
3. 雑誌名 中部哲学会年報	6. 最初と最後の頁 126-139
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Yu Izumi, Masashi Kasaki, Yan Zhou, Sobei H. Oda	4. 巻 印刷中
2. 論文標題 Definite Descriptions and the Alleged East-West Variation in Judgments about Reference.	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 Philosophical Studies	6. 最初と最後の頁 印刷中
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 鈴木真	4. 巻 46
2. 論文標題 価値判断の対立を言語の不確定性によって説明する試み	5. 発行年 2016年
3. 雑誌名 倫理学研究	6. 最初と最後の頁 印刷中
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計36件 (うち招待講演 9件 / うち国際学会 10件)

1. 発表者名 鈴木貴之
2. 発表標題 精神医学における医学的問題と社会的問題の線引き
3. 学会等名 第115回日本精神神経学会学術総会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Kasaki, Masashi
2. 発表標題 Archery and Liezi's Conception of Virtues
3. 学会等名 2019 Canadian Philosophical Association Meeting
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 笠木雅史
2. 発表標題 「哲学」の概念工学とはどのようなことか
3. 学会等名 2019年度哲学若手研究者フォーラム
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 太田紘史・笠木雅史
2. 発表標題 功利主義は進化論的暴露から逃れられない
3. 学会等名 日本科学哲学会第52回大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 鈴木貴之
2. 発表標題 「心」の概念工学の可能性：哲学の視点から
3. 学会等名 日本社会心理学会第59回大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 鈴木貴之
2. 発表標題 倫理学における直観の重要性と信頼性
3. 学会等名 哲学会第57回研究発表大会（招待講演）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 笠木雅史
2. 発表標題 知識と方法：哲学とクリティカル・シンキング
3. 学会等名 応用哲学会第10回年次大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Masashi Kasaki
2. 発表標題 How Warranted is the Philosopher's Belief in the Method of Cases?
3. 学会等名 Yonsei Philosophy Workshop（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Masashi Kasaki
2. 発表標題 Kinds of Epistemic Virtues
3. 学会等名 4th Conference on Contemporary Philosophy in East Asia（国際学会）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Masashi Kasaki
2. 発表標題 Gettier Does not Do It, but He may
3. 学会等名 24th World Congress of Philosophy (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Masashi Kasaki
2. 発表標題 Problems of Translation for Cross-cultural Experimental Philosophy
3. 学会等名 Entia et Nomina 2018: Formal Philosophy Workshop (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Masashi Kasaki
2. 発表標題 The Epistemological Challenges of the Evolutionary Debunking Arguments
3. 学会等名 Frontiers of Epistemology (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 太田紘史
2. 発表標題 実験哲学への誤解反論に潜む誤解：フランクファート型事例の場合
3. 学会等名 応用哲学会第10回年次研究大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 太田紘史
2. 発表標題 リベット型実験の再検討：経験される自由の観点から
3. 学会等名 科学基礎論学会2018年度総会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 太田紘史
2. 発表標題 心の概念工学にまつわる規範的問題
3. 学会等名 日本社会心理学会第59回大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 鈴木貴之
2. 発表標題 道徳性にかんする経験的研究の哲学的意義
3. 学会等名 新・社会心理学コロキウム（招待講演）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 鈴木貴之
2. 発表標題 道徳的直観の必要性和信頼性
3. 学会等名 道徳・社会認知研究会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 太田紘史
2. 発表標題 意識のハード・プロブレムは自然化できるか：論争史と新たな展望
3. 学会等名 北海道大学講演会（招待講演）
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 Koji Ota
2. 発表標題 The Complex Nature of the Concept of Free Will
3. 学会等名 Hiroshima Philosophy Forum #1 Mind and Cognition（招待講演）
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 笠木雅史
2. 発表標題 レポートリテラシーと認識規範
3. 学会等名 応用哲学会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 Masashi Kasaki
2. 発表標題 Topic and Reference: Are Japanese Speakers really Descriptivists?
3. 学会等名 Society for Exact Philosophy 2017（国際学会）
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 Masashi Kasaki
2. 発表標題 Philosophical Methodology in Historical Context
3. 学会等名 メタ哲学セミナー：Intuitions and Philosophical Methodology: Historical and Contemporary Perspectives
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 笠木雅史
2. 発表標題 形而上学的分析と言語的分析：ケンブリッジ分析派、論理実証主義、オックスフォード分析派
3. 学会等名 日本科学哲学会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 Masashi Kasaki & Yu Izumi
2. 発表標題 The Godel Case and Definite Descriptions in Japanese
3. 学会等名 APA Pacific Division Meeting (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 笠木雅史
2. 発表標題 分析哲学方法論史：分析的方法の多様性
3. 学会等名 第59回名古屋哲学会講演会 (招待講演)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Takayuki Suzuki
2. 発表標題 Engineering the Concept of Free Will
3. 学会等名 31st International Congress of Psychology (国際学会)
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 鈴木貴之
2. 発表標題 自然主義者が物理主義者となるべき理由
3. 学会等名 日本科学哲学会
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 井頭昌彦
2. 発表標題 哲学的自然主義は何を排除するのか？
3. 学会等名 日本科学哲学会
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 井頭昌彦
2. 発表標題 多元論的で頑強な実在論には(どの程度)見込みがあるのか？
3. 学会等名 日本現象学会
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 Koji Ota
2. 発表標題 The Philosophical Significance of Social Psychology: The Case of Free Will
3. 学会等名 31st International Congress of Psychology (国際学会)
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 太田紘史
2. 発表標題 自由意志論を生み出す心理：記述的研究に向けて
3. 学会等名 日本科学哲学会
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 笠木雅史
2. 発表標題 日出る国の住人は本当に記述説支持者なのか？
3. 学会等名 第8回応用哲学会
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 Masashi Kasaki, Hiroko Kamide, Takashi Ikeda
2. 発表標題 Individual Knowledge and Common Knowledge in Japanese
3. 学会等名 International Conference on Ethno-Epistemology - Culture, Language, and Methodology
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 Masashi Kasaki
2. 発表標題 What is Philosophical Understanding?
3. 学会等名 Workshop on Williamson ' s Philosophy
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 Makoto Suzuki
2. 発表標題 Moral Realism and the Wide-Spread Directed Change in Moral Judgments
3. 学会等名 The 3rd CCPEA (国際学会)
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 鈴木真
2. 発表標題 経済学は倫理学を必要とするか : Partha Dasguptaにおける倫理的価値と事実の分離
3. 学会等名 日本倫理学会
4. 発表年 2016年

〔図書〕 計6件

1. 著者名 鈴木貴之 (編)、笠木雅史、和泉悠、太田紘史、鈴木真、唐沢かおり	4. 発行年 2020年
2. 出版社 勁草書房	5. 総ページ数 216
3. 書名 実験哲学入門	

1. 著者名 蝶名林亮(編)、笠木雅史、太田紘史ほか	4. 発行年 2019年
2. 出版社 勁草書房	5. 総ページ数 370
3. 書名 メタ倫理学の最前線	

1. 著者名 納富信留、檜垣立哉、柏端達也(編)、笠木雅史ほか	4. 発行年 2019年
2. 出版社 ミネルヴァ書房	5. 総ページ数 232
3. 書名 よくわかる哲学・思想	

1. 著者名 戸田山和久、唐沢かおり(編)、鈴木貴之、太田紘史ほか	4. 発行年 2019年
2. 出版社 名古屋大学出版会	5. 総ページ数 281
3. 書名 『<概念工学>宣言! : 哲学×心理学による知のエンジニアリング』	

1. 著者名 信原幸弘編、鈴木貴之ほか	4. 発行年 2017年
2. 出版社 新曜社	5. 総ページ数 301
3. 書名 ワードマップ 心の哲学	

1. 著者名 人工知能学会編、鈴木真ほか	4. 発行年 2017年
2. 出版社 共立出版	5. 総ページ数 1600
3. 書名 人工知能学大事典	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	鈴木 真 (Suzuki Makoto) (30536488)	名古屋大学・人文学研究科・准教授 (13901)	
研究分担者	笠木 雅史 (Kasaki Masashi) (60713576)	名古屋大学・教養教育院・特任准教授 (13901)	
研究分担者	井頭 昌彦 (Igashira Masahiko) (70533321)	一橋大学・大学院社会学研究科・教授 (12613)	
研究分担者	太田 紘史 (Ota Koji) (80726802)	新潟大学・人文社会科学系・准教授 (13101)	
連携研究者	唐沢 かおり (Karasawa Kaori) (50249348)	東京大学・人文社会系研究科・教授 (12601)	

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
連携研究者	戸田山 和久 (Todayama Kazuhisa) (90217513)	名古屋大学・情報科学研究科・教授 (13901)	
連携研究者	青山 拓央 (Aoyama Takuo) (20432734)	京都大学・人間・環境学研究科・准教授 (14301)	